

ワンダーラーとしてのボーネル

— 牧師館の子 Hermann Bohner(4) —

井上 純一

はじめに

ヘルマン・ボーネルは、ワンダーフォーゲル運動の提唱者であるカール・フィッシャー (Karl Fischer) と板東俘虜収容所で再会している。俘虜収容所でのボーネルとフィッシャーとの交友や収容所行事のハイキングでのボーネルの積極的な参与については、筆者の資料からは不明である。しかしここで概略紹介する資料からは、ボーネルが日本での長い在住の楽しみにしていたことのひとつが、ワンダーフォーゲルであることを知ることができる。

ボーネルは、ハレ大学時代(1904～1906)にフィッシャーの創設した「アルト・ワンダーフォーゲル」に参加し、フィッシャーがハレを去った後に、そのクラブの指導を行っていた。ワンダーフォーゲルは、高さを重視する山岳登山とは異なり、山野を自由に歩きまわり、自然そのものの中に身をおくことを楽しむ活動であった。ワンダーフォーゲルは「渡り鳥」を意味しているが、そこには日常的な社会生活から解放され自由な精神になる自然主義的意味が込められている。ワンダーフォーゲルでは鳥(フォーゲル)のように自然の中で歌うことも盛んになされていたが、それも世界を自由に飛びさえずる鳥の姿との関係であった。

ハレの青年時代以後は、ボーネルもワンダーフォーゲル運動それ自体には疎遠になったが、この時代に身につけたワンダーフォーゲルをその後も生活の一部にしていた。またボーネルは、教材「ドイツの歌集 Deutsche Lieder」(1959)を編んで授業で歌唱していた。その中にはワンダーフォーゲル運動でよく口ずさまれていた歌が数多く組み込まれている。

ボーネルが日本で最初に居を構えたのは、兵庫県の芦屋であった。阪神間に位置するこの土地をボーネルは至極気に入った。阪神電鉄の芦屋駅から家までの堰堤上の松並木に沿う道は、いつも静かで、騒々しさを厭うボーネルにはぴったりしていた。ボーネルは「静寂」が日本文化の中心に座っていると考えており、「お辞儀」の後に続く一呼吸の暫しの沈黙の間もそうだし、神社の杜の静粛など「静寂」な道に入ると自分は日本を体感していると実感するのである。それは、自然の中に身が溶け込むような感覚を彼に与えたという。そうした感覚は、恐らく自然に身をおく青年期のワンダーフォーゲルとほぼ同じであったのである

う。

芦屋に住んでいたのは4年間にすぎないが、この間に頻繁に六甲山系に足を踏み入れていた。慣れない日本の生活を癒すために、妻ハンナを誘ってのワンデリングはその後、大阪市住吉区、西宮市に居を移しても、ポーネル夫妻の生活の中に深く根づいていった。ポーネル夫妻は、戦後も借り続けた夏の軽井沢の別荘からも信州の土地や山にもでかけているが、授業のある間は、近畿の山や里をあるいた。それらはポーネルにとっては芦屋の静寂な道と同じように日本を身体そのもので理解することでもあった。

この芦屋時代にポーネルは結局活字にはしなかった六甲山系ワンデリングの文章を残している。それは“Ashiya”という表題のついた、1923/1924年の日本生活最初の年のワンダーフォーゲルの記録である。それは、タイプ原稿で鉛筆書きのワンデリング先が書き込まれている¹。

彼は、日本理解の重要な素材として自分の足によって気づいた日本の風景、情景、人々の姿や生活を書きとめ、それらを素材にして後に『日本の風物 Japan Bilder』（1954）を出版しているが、この初期のワンデリングでは、むしろ青春時代のワンダーフォーゲルを彷彿させるような「歩き」と周囲の姿を描いている。

六甲山は日本の近代登山の発祥の地（1874年にアーネスト・サトウ等による登山）とも言われているが、1910年には日本最初の社会人山岳会とされる神戸徒步会が、24年にはロック・クライミング・クラブが結成されており、信仰の対象としての山行きとは別の形の登山が楽しみ始められていた。ポーネルはそうした動きとは無関係であるが、奇しくも黎明期の六甲登山の記録をも遺したことになる。

また日本におけるワンダーフォーゲル活動は、明治大学出身の出口林次郎が1931年に社会人を対象とする「奨健会ワンダーフォーゲル」を結成したのが最初であるが、明治大学では1928年にワンダーフォーゲルに連なる「駿台ある

1 この記録はA4タイプ原稿で、本文76枚写真26枚で構成されている。筆者が参照したのは、大阪大学外国語学部（旧大阪外国語大学）地域文化学科ドイツ語専攻講座に保存されているものである。散文詩的にワンデリングが書きとめられている。これを何故出版されなかったのはわからないが、用意された原稿の体裁や写真の説明書きからも、ポーネルは出版する意欲をもってたと推測できる。

この未発表の記録の参照には、大阪大学外国語学部の野村泰幸教授にお世話になった。氏の調査によって、「ヘルマン・ポーネル先生百年記念展示会」（1984年）に使用され、旧大阪外国語大学ドイツ語科に保管されたが所在不明であったポーネルの資料を筆者は読むことができた。

こう会」がすでに活動をしていた。「あるこう会」は1936年に「明治大学ワンダーフォーゲル部」に部名を変更している。戦前には明治、慶応義塾、立教の三大学にワンダーフォーゲル部が置かれていた。戦後の高度経済成長期にともなう学生生活の余裕と登山・旅行の大衆化にあわせて、各大学にワンダーフォーゲル部が学生によって次々と結成されていった。ワンダーフォーゲルに先だってすでに1922年に日本ボーイスカウト連盟が結成され、青少年の野外活動が始まっていたし、報知新聞の池田林儀著『ワンダーフォーゲル』（1924）が出版されていた²。ポーネルのワンデリングは、こうした日本国内の動きとは別個であるが、丁度この時期と重なるものであり、始まったばかりの日本における野外活動の最初期の記録にもなっている。

古くから六甲山の北側にある有馬温泉への道（魚屋道<ととやみち>）は拓かれていたので、ポーネルもこの魚屋道をたどって有馬温泉へのワンデリングをしているが、それ以外にも彼は幾つかのコースを歩いている。ここでは彼が遺したワンデリング記録の一部を概略紹介し、当時のワンデリングの一端を思い浮かべてみたい。

御影谷を歩く

現在住吉道と呼ばれている登山コースとほぼ同じルートを、ポーネルは御影谷コース（Mikagetal）と呼んでいる。このコースは六甲越えの有馬温泉への最短の道となっていた。山頂には、茶屋（ポーネルは店の名前を書き残していないが、現在の「一軒茶屋」であると推測される）があり、飲み物、ゆで卵、菓子パン（ポーネルは日本式ワッフルパンと記している）、果物を売っており、休憩をとることができた。

自宅のある芦屋から電車で二駅ほど西の、御影駅か住吉駅で下車し、そこから山に向かって谷筋に沿って登っていく。谷を流れる川（住吉川）の水は清く、岩や河原の石にぶつかりながら水しぶきをあげている。処々に大きな建物と水車が川にせり出しており、水車の音が故郷への懐かしさを呼び起こす。一時間ほど川沿いを歩くと、風景はシュヴァルトツバルトを少しばかり思い出させるものになる。そこから山道は険しくなり、曲がりくねった石の多い道をたどる。そこを抜けると、なだらかで丸みをおびた山の頂に達し、灌木の茂みやブッシュは無くなっている。そこからは京都や奈良の遠くの峰や瀬戸内海の碧い海原が

2 城島紀夫「日本ワンダーフォーゲル概史」、日本山岳文化学会『山岳文化』第8号（2008）、第9号（2009）参照

臨める。この登山路は山と水の美しい登りになっている。

彼によれば当時の踏み跡は、最初まだ薄かったが、幾度もワンデリングされるうちに次第にはっきりとした登山路になっていったという。ボーネルはこのように次第に道がはっきりなっていくことを喜び、ドイツでの高原のワンデリングのようだと感じている。草が生み出す新鮮な空気が歩く者を迎え、この手つかずの世界の静けさが、ワンダーフォーゲルの喜びなのである。

ボーネルは、授業を終えて帰宅した夕刻から夜にかけてしばしば歩いたという。月が瀬戸内海に上がり、その光の中で笹の葉が揺れ、コオロギが鳴く夜がとりわけ気に入っていた。そうした夜行登山のある体験を彼は特に書き記している。

それは雪の薄く積もったワンデリングの夜であった。雪と月明りの中、山の精気を漂わす空気を吸いながら峠の茶屋についた。もう夜半に近かった。茶屋に人がいるわけはなく、木戸も閉じられているはずだった。障子窓には明かりも見えなかった。あたりは暗かった。ところが小屋に辿りついてみると、引き戸は開いたままであった。暗闇の中にかすかな明かりがちらついていた。それは山の精霊の光を思わすようなものだった。恐る恐る入っていくと、明かりとみえた火鉢の周りに何かがかうずくまっていた。闇の中の炭火で浮かぶその姿に一瞬山の恐怖にとらわれた。目が慣れると、姿が浮かび上がった。それは、煙管をくわえた背中の中曲がった年寄り三人であった。彼らは黙ったまま煙草をくゆらせていた。

挨拶代わりに休ませて欲しいと言うと、沈黙一闇の中では一層長く感じられた一の後で一人が低く囁くような小声で応えて、人形劇のように三人はそろって首をたてにふった。一人が黙ったまま身体を横にずらして、火にあたれる隙間を譲ってくれ、座布団をだしてくれた。他の二人は、火鉢にかけてあったものをとりあげた。急須と茶碗が現れた。お茶が注がれた。まず客人に、次いで自分らに。そして薄い熱い茶を、大きな音を立てながら彼らは啜った。

何をしているのだろうか？三人の肩にかかっているものから彼らの仕事が推測できた。彼らの仕事は背中に大きな荷物を背負って、とても登れそうもないきつい斜面のブッシュや道を登り降りすることであった。谷筋でする一番苦しい仕事をしていたのだ。土を掘りかえし、水の中に入り、若木や植物を植えかえ、雑草を抜く仕事をする人たちであった。日本では山もまた庭なのである。彼らは重い荷物を背負って、山の斜面をはいのぼり、小屋についたのだ。ここは、彼らには仕事が終わった事を感謝する「聖殿」になっている。だから彼らは静かに何も言わず、震える手に湯呑をもって、お茶を啜っている。心の満足と静

けさ、平和な生の喜びを感謝している。

お茶を御馳走になり、下り道と距離を訪ねて、ポーネルはその「聖殿」を後にした。月明りの中を三人から受けた「生の喜び」を感じながら、教えられた道をくだった。いつもの半分の時間で家にたどりついた。

この夜の出来事を、しばしばその後も彼は思い出すという。その後の彼の業績を読んでいると、それは日本の「聖」と「俗」、「静」と「動」の感覚的なものを彼なりに始めて知った日ということでもであると、筆者には思える。

芦屋と御影の間で

ポーネルの自宅から一番簡便なワンデリングは、自宅のある芦屋から直接、御影谷に向けて山を登ることであった。この道の途中には大きな老松があり、それは際立って高く、神木のようにであった。その下には石像が祀られている。そこまで登ると景色は開けるが、さらに登っていくと樹木の生えていない場所にでる。ここで道が消えてしまっている。だからその先を誰でも行けるというわけでない。さらに登っていくと、澄んだ水をたたえた美しい池が現れる。それは静かな山の鏡のようであり、夏には良き休息場所になる。さらに進むと六甲山の前山の頂上にでる。ここで御影谷への道は完全に途切れる。御影谷コースに合流するには、15分ほどの厄介な藪こぎをしなければならぬ。ポーネルも通常は、ここで引き返すことにしている。現在の地図を読むと、ポーネルのこのコースは、芦屋ロックガーデンを通り、横池を経て東お多福山への山道である。

このコースをポーネルが好むのは、満月の（に近い）日に夕闇と共に登り始めることである。暗くなると真珠の連なりのような澄んだ夜景が大阪から神戸にかけて魅惑的に眼の下に広がるからである。この道を近郊の人たちも良く楽しむので、ポーネルは日本人のグループにしばしば出会い、日本人の余暇生活の一端を知ることになる。

ある時、お多福山から引き返していると、声が聞こえてきたので、その方向にも道があると考え、そちらへ進んでいった。声は岩山の向こうから聞こえるので、岩を這い上っていくと、4、5人のグループが小さな焚火をして酒を温めていた。彼らは帰宅する様子ではなく、腰を据えて月を眺め、酒を酌み交わし、談笑していた。月と酒、それは、日本的な自然を愛でる余暇の一つだとポーネルは知った。外国人の自分が姿を見せるのは場違いだと察した彼は、もと来た道に戻ったという。

またある時、下駄履きで多くの女性たちが登ってきた。彼女達の目的は、仲秋の名月を愛で、秋の草を摘むことであった。若い女性たちは、年配者を伴っ

て、日没前に頂上に登ってきて、テントや野外で夜を過ごしている。月を楽しみ、街と海の明かりを眺めながら、合唱し談笑し、歓声をあげる。子供達も登ってくる。子供と手をつなぎ、歩けない幼子や赤子は背中に背負って家族や親せきそろって登ってくる。それは美しい風景を楽しむために、である。日本人は、子供や幼児も、それぞれの仕方でもしさを感ずるのだと思う。こうした家族やグループの姿を見ると、何故かポーネルは、ユダヤ人の出エジプトの物語を連想するのである。

有馬温泉行（魚屋道）

古くから魚屋道と呼ばれてきた道をポーネルも歩いている。峠からの下り坂は急である。道はどんどん下っていく。急傾斜で危ない箇所もいくつかあるが、近年はワンデリングを楽しむ若者も増えていて、道もかなり整備されている。新しい茶屋もでき、峠道にあった茶屋も増築された。ワンデリングは、見事な森を通過して有馬に下りていく。下っていくにつれ、この森の亜熱帯の樹木が美しく成長している。大きなカラマツ、杉、ヒノキが、温泉入り口にある杉本ホテルまで続いている。杉本ホテルの女将は愛想がよく、気が利き、もてなし上手である。彼女は客の希望を見分け、望んでいることをさっし、外国人にも口にあう食事をすぐにだしてくれる。冬だと部屋を素早く暖めてくれるし、手を洗う水や風呂を待つ間もなく手際よく準備してくれる。この客もてなしの良い家でポーネルは有馬行の度に休むのであった。

有馬温泉は、当時神戸周辺に在住していた外国人がしばしば訪れた保養地で、増田ホテル、清水ホテルなど、外国人が泊まるホテルが何軒かあったが、この杉本ホテルも外国人に人気のあったホテルである。ポーネルが書き残している女将は、杉本ヨネという人物で、英語でよく世話をすることができたと言われている。

暫しの休憩や宿泊をした後、ポーネル夫妻は、有馬駅（有馬軽便鉄道）に向かうのであるが、いつもは人力車（ポーネルの言葉では Ricksha）を雇っている。駅までは約 20 分程度で到着する。料金は一人 70 錢。鉄道は時刻通りには運行していないのが常であるので、その時間を見測ってホテルを出発するのだが、時として列車が時刻通りに出発してしまっている場合がある。

そうした場合には、鉄道とは逆の方向の山越えて生瀬へ向かう道を歩くことになる。2 時間程度のワンデリングになるが、この道は存外広く良く整備されている。有馬から標高 600 メートルまで登って、峠から谷筋にそって生瀬へと向かう。生瀬から宝塚へはそれほど時間はかからない。

有馬駅で列車に乗れる場合は、この道の方向とは逆をたどる。「有馬鉄道」は支線で、4、5 駅先の本線と合流している。この鉄道の小さな車両は、日曜日には行楽客で溢れ、もちろん 2 等車しかない。終点である本線の駅は三田（さんだ）である。三田から鉄道は南東に向けて六甲山系の下を通過して宝塚へと伸びている。トンネルが多い鉄路であるが、車窓からの景色は素晴らしい。道場と武田尾の駅が途中にある。

武田尾ワンデリング

秋の一日、ポーネルは武田尾へ向かう。武田尾は六甲山系の北側にあり、現在 J R 福知山線の武田尾駅がある。武田尾の駅前には 2、3 軒の果物や飲物を売っている屋台組のような店があり、それ以外には何も無い。まだ昼だというのに、夕方のように陰っている。川は谷深く流れており、傾斜の厳しい山の壁が迫っている。

店の人たちに、山越えて宝塚に行く道や、川沿いのハイキング道、道場への道など、ワンデリングできそうな道を尋ねたが、いずれも「そんな道はない」ということであった。辺りを見渡すと谷筋の真ん中に道が見え、その向こうに橋がかかっており、家があるのが見えた。そこでポーネル夫妻はそちらに向かって歩くことにする。

谷筋の道は素晴らしかった。しばらく歩くと川にかかる橋にでたが、その橋から、上流、下流とも美しい風景が拓けており、下流の谷は緩やかに弧を描いている。橋のたもとの木造の家は大きく、大屋根が谷の森の中に羽のように広がっている。森と屋根の間から黄金の日差しが差し込んでいる。温泉が湧き出ている。ポーネルは、駅から武田尾温泉に向けて歩いているのである。

この辺りを少しあちこち歩き回る。流れにそって歩き、カーブを描いている箇所まで座って列車が谷の上流から走ってくる様子を眺めた。岩づたいに対岸まで渡ったりした。水位が低い時には川床を歩いて道場までワンデリングすることも可能なように思えた。

道場に向けて山は低くなり、山系は平坦になり始めているので、あちこちから快適なワンデリングが簡単にできそうである。ポーネルは流れにそって歩くことにした。素晴らしく晴れた日で、山は秋色に輝いている。辺りは人がはいっていないように思えた。外国人もここには来ていないし、都会人もこの手つかずの世界にはやってきていない。ポーネルは、老女に 1 人、学校帰りの子供たち数人に会った。茅葺屋根の家が、森を拓いて作った土地にたっている。背中に木の束を担いだ農夫が、手すりがない小橋を渡っている。

川沿いを歩いて行くと、広い道になった。鉄道は見えなくなっていたが、進むとすぐに鉄橋があらわれた。大雨で橋は流されてしまったままで、川を渡るには鉄橋を利用するしかない。鉄橋の枕木には、軌道の真ん中に歩行用踏み板が敷かれていた。鉄橋は長かったので、渡りきるまで、少し恐怖心を押さえる必要があった。渡りきると鉄道沿いに、行こうと思っている方向に向かう道がついていた。もちろんその道を進んだ。その道をしばらく進むと、八人連れの工夫に出会った。彼らはつるはしで作業をしていた。仕事の手を休めて、作業員は私たちに話かけてきた。「良いお天気で」に始まり、「どちらへ行くんかね？」という質問から、この単線軌道のトンネルを抜けなければならないことになるので、この先を行かないほうが良いと忠告を受けた。川の向こう側に道があるという。「ここから小屋が見えるでしょう。あの側を通る道がある」「川を越えるには？」「もう一度鉄橋にもどって渡らなければならない」丁寧な日本語で応えてくれた。「道ははっきりしている？」「ええ、はっきりついている」

軌道沿いをもどっていると、別の工夫のグループが向こうからやってきた。先ほどと同じように「良いお天気で」と挨拶をすると、「何処へ？」と聞かれた。鉄橋を渡って向こうへ行こうと思っていると話すと、ひとりが「すぐ列車がやってくる」と注意した。「客車？」「いいえ、貨車が」。すぐ脇を貨車が走るのを経験できるので、楽しくなって待つことにした。数分後大きな貨物機関車が角を曲がってやってきた。機関士が愉快げに我々に手をふってくれた。貨車が通り過ぎると、車掌が振り返って、我々を長い間じっとみつめていた。線路は空いた。単線なので次の列車が来る前に鉄橋を渡りきることができる。落ち着いて橋を渡れるので気持ちが楽になった。

細い踏み跡道があった。静かで周囲は美しい。水がちょろちょろと流れ、谷へ流れ落ちていく。森は色彩豊かで、栗、柏が陽の光に輝いている。樹木が紅葉している。その間に緑の針葉樹や広葉樹が広がり、カラマツがたっている。拓けた場所では青空がすみぬけている。一時間半歩くと、農家の小屋が数軒みつかった。小さな平地が狭い区画で区切られていた。柿の実が生っており、親鶏とひよこが餌をついばんでいる。見える限り山と森の谷である。

更に歩いた。川は西に曲がっている。岩が道の前にたちはだかり、細い道は岩の左を巻いている。道は岩の間を流れる水で途切れ途切れになっていて、しかも岩にさしかけられている橋代わりの板は割れている。葎が密集し、その茂みが邪魔をして少しずつしか前に進めない。以前に刈り取られた葎がまだ左右に残っている。そこから我々は、間違いない足跡をたどっていると推測する。

我々は登り続ける。頭上には木が広がっている。幹の根元の森の土は青い。我々

は拓けた場所にでた。そこには切り倒された幹や薪が積まれていた。樵(きこり)が仕事をしているのだ。まだやかんが炉にかかっている。やかんはまだ温かい。我々は呼び声をあげたが、答えは返ってこなかった。道を教えてもらえる人は、この辺りにはいない。道はもうついていないし、何回も方向を変えている。我々はどの方向へいけばよいのか？周囲の中で一番高い頂に登る、という日本伝来の原則に従って、我々はさらに登っていった。溪谷は薄暗くなり始める。夕闇が迫るころ我々は高い峰に登り切った。どの方向へ我々は向かうべきか？列車の走る音を聞くために耳を澄ます。薄闇が近付いている世界を通して汽笛だけが聞こえる。それはあちこちで木霊する。木霊では道はわからない。列車も、線路が東や南に曲がっているのに応じて方向を変える。列車はどこを走っているのか？武田尾はどちらにあるのか？

ボーネルは観察し、推測し、計算し、決断する。ボーネルは一つの峰の下に認められる林道の一つに下っていくことを短時間に決断した。谷の方へ森を降りて行くと、突然キノコを採っている人々に出くわした。聞き知ったところでは、この近隣の斜面では松茸が採れるので有名だと言う。

話をしながら20分ほど林道を歩くと、武田尾の駅に到着した。列車がトンネルからあらわれた。客車には元気よくうたっている人、ふざけあっている人、疲れた様子の人、日曜のハイキング客がたくさんいる。ボーネルとハンナもその中に混じって家路へとついた。

沢筋のワンデリング（武田尾）

美しい溪谷からの登山、波のうねりのように起伏を描く森、山また山の連なり。ひとがほとんど訪れないし、ボーネル自身も初めての森林。そこには沢の流れや樹木や森、山の上下以外に特別なものはない。木々やブッシュやシダ類、窯の中の残り炭。杣人に時々出会い、女も老人も片手に鎌をもって道の草を払い、背負った思い荷物を背から降ろすためや、休憩の際に支えにする杖をもう一方の手に握っている。

ボーネルは、まだ入ったことのない山に登る。頂上にたつと視界は開ける。森林は薬缶のように丸みを帯び、沢の流れも聞こえる。岩壁の向こうにまた岩壁が見える。山の南の方向は、平野になっている。その向こうの遠い地平にボールをかぶったような海が見える。

細い踏み跡をたどって登った山上には茂みがない。砂地で低い松が生えているだけで、突然素晴らしい光景が開ける。深く切れ込んだ谷、森からせり出している岩壁。山の奥へと山峡は入り込んでいる。岩壁の峡谷は、薄明るくなっ

てきた遠方へと続いている。下ることにする。

太陽は山の端に近づいている。霞がかかった光が松を包んでいる。急がねばならない。下りの谷筋をさがす。もともと道は広くはない。ボーネルの目からみても細い踏み跡が、少し先で谷筋の方に曲がって無くなっている。茂みの中でも下り道の踏み跡が見つかるようにと思う。谷筋は暮れかかり、遠くは黒くなり始めているが、山上の方向はまだ明るい色をしている。狭い道をたどりながら谷筋へと下る。大人の背丈ほどの下から水がしみ出すが、ツツジの群落に花がつき始めている。アルプスに咲く花と同じような色。柔らかな孟宗竹の梢が来る夜の息吹で垂れている。下の谷の緑の森の中にトウヒ（唐檜）や糸杉がそびえている。雑木が森の道を埋めている。

道は階段状になる。石の階段。表面にはシダが覆いかぶさり、苔で緑になっている。シダはいたるところに広がっており、大人の背丈ほどにも成長し、葉の先はギザギザで柔らかい羽のようである。赤みがかかった色のシダ類は細工物の飾りのごとく石を飾っている。亜熱帯の森の雑草類。40段下り、さらまた100段、少し平らな所を歩くとまた50段下る……。多くのものが荒れている。岩塊が滑り落ち、道をふさいでいる。沢にさしかけてある木の幹は古く、腐っている。またあるところでは道が崩壊している。立ち枯れしている木には葛が巻きついている。倒れた木の朽ち果てた根元には小さな茸が緑の中で輝いている。

ボーネルが辿っている道は突然崩壊している。山が崩れ岩壁が山腹をずり落ちている。そのガラ場の向こうには道はみえない。ガラ場の先には沢が岩のブロック越しに谷へと流れ落ちている。踏み跡のない森の中を突き進むのは避けたい。森を突っ切るのは、土地を知らない者たちで、この地の山を歩いている人間は、鎌を持たないで、そんな無謀なことはいない。

日本の大新聞の一つである、数日前の毎日新聞に、十年来休みの日に山に登り、ブッシュや森をさまよう以上の喜びはないと、ある外国人が書いていた。その彼が一度だけまったく二度と経験したくない苦しみを味わったことがあると書いていた。そういう気分させたのは、一見危険には見えない日本の竹藪や大人ほどの丈の灌木の茂みであった。それが日本の山の特徴である。

どうするか一瞬躊躇して立ち止まり、斜面を見降ろした。向こう側の斜面の夜の壁が明るくなり、トンネルから出てきた機関車が蒸気をはきながら通り過ぎ、視野から消えていった。それだと武田尾と生瀬の鉄道区間にいることになる。鉄道は谷筋を走っているので道や橋があるにちがいない。

ボーネルとハンナは新聞記事を読んだにもかかわらず、下りていくことにした。ブッシュの茂みに突っ込んでいくと踏み跡らしきものがみつかった。彼ら

は深い森に入って行った。斜面は険しく、身体を伸ばしてずり落ちないようにブレーキをかける。6メートルほど坂を滑り降りたりする。細い枝につかまり降りる。トゲのある枝が邪魔になる。

こうして下にたどりついた。約40メートル幅の川の前についた。対岸に鉄道が通っている。鉄道の下に道がみえる。人が歩き、自転車が走っている。列車がヘッドライトをつけて走ってくる。

200歩ほど下流には、高い垂直の岩が谷に落ち込んでいる。上流には道がないように見える。日本の川は流れが速い。土地っ子なら着物をまくりあげて、草鞋(わらじ)で渡るのだが、ヨーロッパの人間の服装では、服やズボンそして靴が水を吸い、全身びしょ濡れになってしまう。どうすればよいだろう？月が山の木の梢の上にてでている。その方向を見ると、月明かりの下に、月に向かって登って行くような道が山側についているのが見える。静かな月、話しかけるような月、道を指し示す月。我々は月にしたがって進む。月が家路を教えてくれる。

ボーネルは、日本のワンデリングを楽しむ。灌木の茂みやブッシュ、笹や竹藪の日本の山野でのワンデリングは、ドイツでのそれとは、およそ違ったものであただろう。しかし自然に「浸る」という点では変わりはない。ワンデリングは、日本の自然と風景を身体に刻みつけるものとなる。この身体に刻み込まれた日本の風景と自然から、ボーネルは日本の精神を理解している。戦前の日本精神から戦後の世阿弥の能研究に至るボーネルの日本学の根底には、彼が見出した、こうした日本の自然と風景が流れているように思える。彼が生活の第一歩として、大阪ではなく、六甲山の麓の芦屋に居をかまえたことが、その後の彼の研究生活の根底的糧になっているのだと思う。

